

## N型糖鎖の付加効率を制御する内在性機構とがんにおける役割、 そして糖鎖研究への利用



講師

原田 陽一郎 先生

大阪国際がんセンター 研究所

糖鎖オンコロジー部

チームリーダー

◆日付：2月 2日（金）

◆時間：16時35分～18時05分

◆場所：E203 教室

### 講演概要

哺乳動物細胞において、アスパラギン結合型糖鎖修飾(N型糖鎖修飾)は小胞体で合成されるタンパク質の主要な翻訳後修飾の1つであり、糖タンパク質の安定性や生理活性の調節を担う。これらのN型糖鎖の機能は細胞の恒常性維持に極めて重要であるため、N型糖鎖修飾はタンパク質の決まった位置に、可能な限り最大の頻度で起こるように厳密に制御されている。一方、我々の研究から、哺乳動物細胞はグルコース飢餓を感知するとN型糖鎖の前駆体を分解し、N型糖鎖修飾の頻度を低下させる機構を備えていることが明らかになってきた。本コロキウムでは、N型糖鎖修飾の可塑性と名付けたこの細胞機能の発見に至った経緯を紹介するとともに、がんの進展における役割について議論する。

問い合わせ先

伊藤和義：kazuyoshi★soka.ac.jp

研究所HP：<https://www.soka.ac.jp/glycan/>

